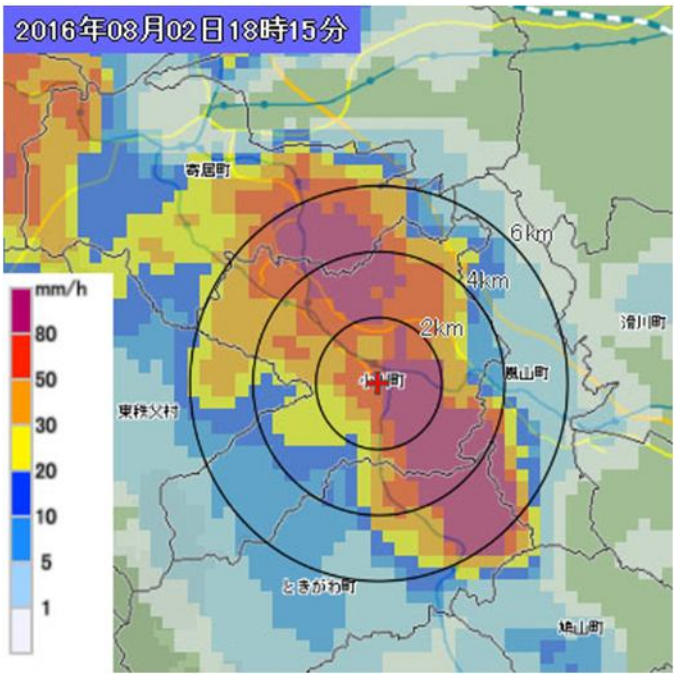
「日々の理科」（第 761 号） 2016（H28),-8,-6

「雷雲の観察（４）」

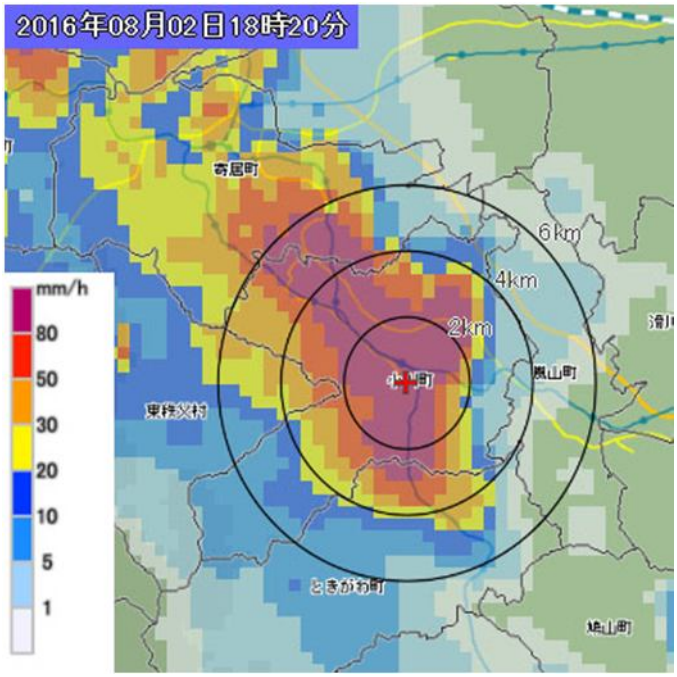
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

雷雲（積乱雲）は、数キロ離れた位置から観察すると、その圧倒的な迫力を実感できる。私には自然の造形としての、一種に美しささえ感じられる。実際に積乱雲の真下に入ると、どんな現象が見られるのだろうか？埼玉県小川町に設置した観測用カメラで、積乱雲の真下の様子を観察してみた。



８月２日の夕刻、非常に優勢な積乱雲が、小川町を「直撃」した。上図は 18 時 15 分の高解像度解析だ。積乱雲は、栃木県佐野市付近から発達しながら南下しして、埼玉県比企郡や大里郡を襲ったのだ。

写真は、同時刻の小川町の様子である。上図の＋の位置から真東を撮影した画像だ。画面左から降雨帯が迫ってきているのがわかる。



そのわずか５分後、小川町のほぼ全域が、最も激しい降雨帯に入った。積乱雲の真下に入ったことは疑いない。強い降雨帯は直径 10km 近くに及び、かなり優勢な積乱雲だったこともわかる。

わずか５分で、地上の様子も激変した。あっという間に真っ暗になり、激しい降雨に見舞われている。夏至はとっくに過ぎたとはいえ、この日の日没は 18:50 で、まだ 30 分もある。しかし夜のように暗くなってしまった。これは、積乱雲の雲頂が 12000m 付近にあり、雲粒や雨粒が地上にまで達したため、太陽からの光線がほとんど届かなくなってしまった為である。静止画ではわからないが、カメラも激しく揺れていた。突風（ダウン・バースト）も発生していたのだろう。